# 論 文

# 地域社会学入門:鈴木栄太郎の聚落社会の概念を基底において

山本 努1)

## 1. はじめに

本稿は拙稿「社会学入門:富永社会学批判を含んで、高田社会学を軸に」『現代社会研究』9号に続く原稿である。ただし本稿のみでも、独立の論稿となっている。

上掲の拙稿で社会学入門を経て、本稿で地域社会学の入門を果たそうという試みである。地域社会学の入門講義にまずどのような理論、概念を基底におくべきかについては、(種々の見解があろうが)まともに議論された形跡はない。筆者は鈴木榮太郎の聚落社会という概念を基底におくのが妥当と考えるが、本稿はそのような地域社会学入門講義の試みである<sup>(1)</sup>。また、集団の概念は社会学のイロハだが、ここでも、種々の見解がある。地域社会学の基盤には、オルムステッドや高田(ないし、ホマンズ)の使い方がいいように思う。

本稿では、まず、集団について説明し $(2 \sim 4 \text{ 節})$ 、ついで、地域社会の説明に行く $(5 \sim 11 \text{ 節})$ 、社会関係については、別稿(山本, 2023a)で説明したので、補足的にのみ触れる(11 節)、

# 2. 生活の把握と地域社会の所在

別稿(山本,2023a)でみたように、社会は集団と社会関係からできていた(図1).人々の暮らしはこの社会の中にあるのだから、この集団と社会関係に参与するのが個々の人々の生活構造ということになる。社会学で生活を把握した有力な学説は鈴木(1976:220)や三浦(1986:5)の生活構造の概念がある。ここでは、生活構造を「生活主体としての個人が文化体系および社会構造に接触する、相対的に持続的なパターン」(鈴木)とか、「生活構造とは、生活主体の社会構造と文化構造への主体的な関与の総体であり、社会構造への関与はフォーマル・インフォーマルな社会関係のネットワークによって、文化構造への関与は生活主体の設定する生活目標および様式選好として、具体的に把握できる」(三浦)と定義している。つまり、鈴木や三浦は社会構造と文化体系への参与を生活と見ているのである。生活構造に文化体系への参与を含むのは、鈴木の独創でありその含意は後掲の注2に示すように重要である。鈴木の生活構造論とは、今日の文化体系へ

- 1. 集団の意識をともなうもの(集団)→例:会社,家族
- 2. 集団の意識の伴わざるもの(社会関係)→例:友人相互, 商人と顧客

# 図1 社会(=「具体的意義の社会」)の構成

出典:高田(1922: 99-100), 高田(1952: 32, 42)より作成した, 山本(2022: 図序-6)および前章(図3)の図から転載.

注:「具体的意義の社会」は高田 (1922: 100) の用語で「抽象的意義の社会」とセットの概念だが、本稿では、「具体的意義の社会」を社会と略記する).

<sup>1)</sup> 神戸学院大学現代社会学部現代社会学科

の懐疑や非同調の可能性(たとえば、「デパートやスーパーに山と積まれている商品でも、考えてみれば、本当に必要なものはごくわずかしかない」と思うかどうかなど)を生活から問うものだからである(鈴木、1986:188).

ただし、社会を集団と社会関係の総体と見るという本稿(図1)の立場からすれば、生活構造は、鈴木や三浦とやや違った定義になる。つまり、「社会学の立場では、集団や社会関係への人々(個人)の参与(の束、総体)が「生活」である」(山本、2023b:6)。この本稿の生活構造の定義は、文化体系への関与を生活の構成要素から外している。そこが、鈴木や三浦の定義との違いである<sup>(2)</sup>

勿論, 現実の生活では, 文化体系への参与は重要な構成要素である. そもそも, 生活は人びとの暮らしのトータルな活動だから, 現実を反映するとすれば, あれもこれも(つまり, 生活の構成要素すべてを)入れなければならない. しかし, それは, 一定の学的立場に立つ限り, できない相談である. であれば, 一定のリアリティを担保しつつ, 一定の学的立場で区切るしかない.

上記の山本の生活概念のリアリティを理解するには、フィッシャーの文言は非常に優れている. すなわち、「諸個人の相互結合は、社会の精髄である. われわれの日常生活は人びとのことで頭が一杯であり、是認を求めたり、情をかけたり、ゴシップを交換したり、恋に落ちたり、助言を求めたり、意見を述べたり、怒りを静めたり、礼儀作法を教えたり、援助を与えたり、印象づけをしたり、接触を保ったりしている―そうでなければ、われわれはなぜそのようなことをしないでいるのかと悩んだりする. こうしたいっさいによって、われわれはコミュニティを作り出している. そして人びとは、今日、近代社会のなかでもこのようなことをしつづけているのである」(Fischer, 2002: 19). 同様の認識は日本の社会学ならば、清水 (1954) がよい (3).

このようにしてできたのが、鈴木、三浦、および、本稿の定義なのである。これはどちらがいいとかいう性格のものではない、社会の構成要素に何を含むか、という社会の概念規定や問題意識によって、どちらも妥当な概念規定ということだろう。あとは、その生活構造の概念を経験的な場面(たとえば、社会調査の時など)において、どのように活用するかという問題である。要は、これらは道具なので、道具の所在は知っておき、必要に応じて、使い分けるのがよい。

さてこのように本稿の生活は生活主体(個人)の集団と社会関係への参与である。これを社会の側からみれば、社会が集団と社会関係を通して生活客体(個人)を統制し、形成するということになる。つまり、社会と個人は、個人 $\Rightarrow$ 「集団・社会関係」 $\Rightarrow$ 社会という相互浸透の関係にあり、個人と社会は集団と社会関係を媒介して対面する。この集団や社会関係の多くは地域社会にある。まずは、自分の関わる集団や社会関係がどこにあるか想起してみるといい。おそらく、普通の人は、自分の関わる集団たとえば、家族、職場、学校、遊びや余暇の集団、子供会や青年団や婦人会や老人会などの集団や、社会関係たとえば、親子関係、夫婦関係、親族の関係、近所のつき合いの関係、友人関係、職場の同僚の関係、かかり付けのお医者さんとの関係などはその多くが、一定の地理的範囲(たとえば、〇〇市とか、△△都市圏とか)に収まるはずである。これが、とりあえずの地域社会の定義(またはイメージ)である。

# 3. 集団とは:ホマンズ、オルムステッド、高田、富永の学説

では集団の定義をみておきたい。有力な集団の定義はオルムステッド(図2), ホマンズ(図3), 高田(図4), 富永(図5)の4つがある。まず、これらの集団の定義で共通なのは、人びとが何等かの共通性の意識を持っていることである。集団のこの要素は、「共通性(commonality)を意識」

地域社会学入門:鈴木栄太郎の聚落社会の概念を基底において

集団とは相互に接触し①、お互いのことを意識し、かつある意味をもった共通性 (commonality) を意識している多数 (複数) の個々人②と定義できよう。集団の本質的特徴は、その成員が共通した何かを有し、かつ共通に所有しているものが少しは重要であると信じられていることである

## 図2 オルムステッドの集団の定義

出典: Olmsted (1959=1963:13)

集団とは、ある所与の時間、定義上局外者①と考えられる他の個人とよりも $\overline{何人かのメンバーと多く相互}$ 作用する多数の個人②、すなわちメンバー③よりなると言うことにしよう。

### 図3 ホマンズの集団の定義

出典: Homans (1961=1978: 136)

結合している人びとが自分たちを一の集団と見、一の集団という意識乃至観念①が成員を支配している. ひいては彼等の行動態度が此観念によって規定②せられざるを得なくなる。・・・これを今、社会集団叉は単に集団という。・・・此一の集団をなすという観念といったが、それは一定の人びとが何等かの共通の徴(しるし)をもつという意識内容③をさす。この徴によって人びとが互いに同一のものと見ることである。

#### 図4 高田の集団の定義

出典:高田(1952:31)

社会集団とは、<u>複数の行為者間に持続的な相互行為の累積①</u>があることによって成員と非成員との<u>境界が</u>はっきり識別②されており、また<u>内と外を区別する共属感情が共有③</u>されているような、行為者の集まりをさします。

## 図5 富永の集団の定義

出典: 富永 (1996: 69)

(オルムステッド),「メンバー」(ホマンズ),「共通の徴(しるし)をもつという意識」(高田),「共属感情」(富永)といい方は異なるが、4つすべての定義で言及されている。したがって、共通性を意識していることは集団の定義に重要と一応は考えられる。

しかし、共通性の意識だけで集団は成り立たない。このことを面白く示しているのはオルムステッドである。動物園のトラの檻の前の人びとは、共通の関心(共通性の意識)があって、かつ、みんな近くにいるが、集団ではないというのである。しかし、檻からトラが逃げ出し、人々が近くの食堂に逃げ込み、トラに襲われる恐怖を共有し、協力してドアにバリケードを作り、おびえる子どもを励ましたりすれば、そこには集団ができる。

つまり、集団に重要な要素は共通性の意識に加えて、人々の相互接触(活動)が必要なのであ

る. 図2のオルムステッドの集団の定義の①「相互に接触し」は、このような意味で使われている。つまり、オルムステッドの集団の定義は図6のように要約される.

共通性/共通の徴を持つ集団の観念/局外者とメンバーの区別

相互接触(人々の活動)/行動態度/メンバーと多く相互作用

図6 オルムステッド, 高田, ホマンズの集団の定義

これに非常に近いのはホマンズと高田の定義である。図3のホマンズの定義では、局外者(非メンバー)とメンバーの相互作用より、メンバー同士の相互作用が多いことが集団とされる。図4の高田の定義では③共通の徴を持つという集団の観念によって、②人びとの行動態度が決まってくることを集団とみる。つまり、多少表現は異なるが、図6にあるように、ホマンズと高田とオルムステッドの集団の定義は大体、同義である。

# 4. 集団の緩い定義(ホマンズ)と厳しい定義(富永)

これに対してやや異なるのが、図5の富永の定義である。富永では、②境界識別、③共属感情とあるが、これは、オルムステッド、高田、ホマンズ(図6)の「共通性/共通の徴を持つ集団の観念/局外者とメンバーの区別」と同義である。

ただし、富永の①「複数の行為者間に持続的な相互行為の累積」は、オルムステッド、ホマンズ、高田の集団の定義とは異なる。上記の「トラが逃げ出して、人々が食堂に逃げ込んだ」状態は「持続的な相互行為の累積」ではない。その日限りのアクシデントである(もしかしたら、あっという間にトラに食べられてしまうかもしれない)。したがって、「トラが逃げ出して、人々が食堂に逃げ込んだ」状態は、富永の定義では集団には含まれないとみるべきである。

富永 (1996: 92) が言及する集団の実例は家族・親族、組織(企業,行政組織など)、国家などである。ここから「持続的な相互行為の累積」という条件が付されたのだと思う。この「持続的な相互行為の累積」というのは、富永の例示によれば、「電車の乗客や映画の観衆や盛り場の歩行者」と「一定数の友人仲間」の違いである。前者は「相互行為の持続としての社会関係のシステム」(富永、1986: 14) がないが、後者にはある。富永 (1996: 92) の理解では、前者は群集、後者は集団である。

なお、「トラが逃げ出した状態」を仮に富永の定義でも集団に含むにしても、定義の中核におかれる事例ではない。これに対して、オルムステッドはこの例を中核において集団の定義をしている。ここに富永とオルムステッドの集団のイメージの大きな違いがある。抽象的な概念はその背後に具体的、典型的なイメージがある。両者はセットで理解する必要があるだろう。

さらにホマンズは、オルムステッド、高田、富永とも違う集団の規定である。ホマンズは共通性の意識はさほど重要な基準とは考えない。ホマンズ(1978: 137)にとって、「唯一の本質的な基準は、メンバー相互における相互作用」なのである。この規定を説明する時、ホマンズが例示するのは、工場の一部門で一日の勤務時間だけ一緒にいるような人達(正規職員と非正規・パート・アルバイト・外国人労働者の人達を含めた職場など想起すればいいだろう)や、時々会って食事する何人かの友人の集まりである。ここには、局外者とメンバーの区別はあるが、その人々の共通性の意識(weという意識)は微弱あるいは、不明確な場合がある。したがって、そこに「メンバー相互における相互作用」があるかどうかが重要なのである。「メンバー相互における相互作用」があれば、そこに集団があると考えてもいいだろう。

したがって、オルムステッド、高田、ホマンズ、富永らの集団定義を参照すると、集団の定義を考える時、図7の1、2、3の基準がある。

図7の2はホマンズ, 1プラス2は, オルムステッド, 高田, 1プラス3は, 富永の集団定義と

- 1, 共通性の意識 (We や Commonality の意識)
- 2, 共通性の内部での相互行為
- 3. 共通性の内部で持続的な相互行為

## 図7 集団の定義の基準

なる. ここで2は3よりも広い概念なので、もっとも広い(条件の緩い)定義がホマンズ、ついで、オルムステッド、高田の定義は中間にあり、もっとも狭い(条件の厳しい)定義が富永となる. これを実例で示せば、次のようである.

- ① 動物園のトラの檻の前の人々・・・集団ではない.
- ② 動物園のトラの檻からトラが逃げ出して、近くの食堂 (refreshment stand) に逃げ込んだ 人々・・・オルムステッド、高田、ホマンズは集団である.
- ③ 大講義室の大学の授業・・・ホマンズは集団 (学生は教員の講義を聞いている. 教員も学生の反応をみて講義している. とすれば、そこには相互作用がある. ただし、学生と教員の共通性 (we) の意識は微弱. そのような事例).
- ④ 時々、一緒に食事をする数人の友人たち・・・ホマンズは集団、高田なら社会関係(図1).
- ⑤ 家族・親族、組織、国家・・・富永、オルムステッド、高田、ホマンズ全員集団、

練習問題・・・図7の3つの基準(あるいは、オルムステッド、高田、ホマンズ、富永の定義)をつかって、自分のまわりの集団を列挙してみよう。

# 5. 地域社会の概念

さて、つぎに地域社会(コミュニティ)の概念を説明したい、地域社会とは次のような概念である。たとえば、〇〇市とか△△都市圏という一定の地理的範囲で、仕事や遊びや勉学などの多くの生活活動が営まれていて(つまり、いろいろな生活欲求が充足されていて)、人々がそこを自分達の(所属する)地域だと思えば、そこには「地域社会」がある。つまり(1)一定の土地の広がり(地理的範囲)があり、(2)そこで人々の多くの生活活動が営まれており、(3)そこに人びとが帰属意識(=そこが自分達の地域であるという「われわれ感情(we-feeling)」)を持っていれば、そこには地域社会がある(山本、2023b:1章)。

あるいは、地域とは「其処に或る特定の統一性の(その強弱は別問題として統一性そのものの)存する面積的拡張」あるいは「或る統一性に基づいて封鎖された、外部とは一応切り離された空間」という奥井(1940: 440)の定義も有益である。ここで「統一性」は特定の身分や生活に基づく封鎖性を意味する。たとえば、労働者の街なら、労働者という身分が、別荘の街なら別荘の生活が「特定の統一性」(あるいは封鎖性、独立性、絶縁性)を生み出すという具合である。いずれにしても、「一定の土地の広がりの中にある暮らしと、地域帰属意識(気持ち)」が地域社会を作るのは同じである。これはつまり、オルムステッドと高田の集団概念に近い把握であり、図7の集団の定義の「内部での相互行為」(=暮らし)と、「共通性の意識」(=地域帰属意識)からなる集団として地域社会を定義するものである。

しかし、現実には「内部での相互行為」(=暮らし)も、「共通性の意識」(=地域帰属意識)もほとんどない地域社会もある。たとえば、ほとんど全員が他所から来て、交流も少ない、新住民のみでできている新興住宅地などがある。さらに極北には、災害などで作られる仮設住宅のコミュニティがある。神戸の震災の仮設コミュニティはつぎのようであった。重要な記載なのでやや長いが引用する。

「1995年9月,神戸市西区の西神第7仮設を訪ねた時のことだ.千戸の住宅が並ぶこの仮設では,65歳以上の世帯が58%を占め,うち半分以上は独り暮らしだった.お年寄りが引きこもりがちな

ため、町は異様な静けさに包まれていた。この仮設は、地下鉄の西神中央駅からバスで15分かかる。首都圏から想像すれば「至便」の範囲だが、実際には途中で人影が疎らになるニュータウン造成地の外にあり、バスも1時間に1、2本だ、「孤島」と呼んでもおかしくない「外周、1998:639)。

ここにあるのは、「或る統一性に基づいて封鎖された、外部とは一応切り離された空間」ではある。しかし、ここでは「内部での相互行為」(=つき合いや暮らし)も、「共通性の意識」(=地域帰属意識)もほとんどない。ここに示されるのは地域社会の極北である。

ただし、これは、地域社会だけの話しではない。たとえば、家族という集団でも、家族の実質をもたない家族がある。「成員相互のコミュニケーションないしは相互作用が欠如しており、特に相互的な情緒的支持がなされていない」(Goode, 1976: 168) 空骸家族(empty shell family) それである。

かくて、地域社会にも空骸(empty shell、抜け殻)となった地域社会もある。その典型が神戸の仮設住宅であった。そこでは、つぎのような悲惨なことが起こる。「阪神大震災から3年を前にした98年1月8日、兵庫県警は、県内の仮設で独り暮らしをする人で、誰にも看取られることなく亡くなった「孤独死」の数が190人に達したことを明らかにした」(外岡、1998:641-642)。

練習問題・・・自分の所属する地域社会はどこにあるだろう。あるのであれば、そこには、どのような暮らしや意識があるだろう。考えてみよう。

# 6. 地域社会の必要性:地域社会的統一の概念に触れながら

前節で見た阪神大震災からの報告は、コミュニティの極北の厳しい現実を示した。しかし、逆に、コミュニティの必要性を示したのも、震災からの報告である。震災の時、「多くの人々の命を救い、急場で最も力になったのは、近隣の人々による助け合いであり、人々を支える大小無数のネットワークであった」のである。つまり、「小学校区単位のコミュニティこそが、急性期における最大の救助資源であり、人の命を助ける拠点だろう。広域の大規模災害においては、職業人による消防・警察・行政などの機関はそれ自体が被災し、活動を大幅に制限される。破壊され、寸断された行政ネットワークが修復されるまで、頼りになるのは近隣の人々の相互扶助しかない」(外岡、1998: 704-705)のである。

このようなコミュニティの必要性を示した古典的な概念は、鈴木榮太郎の聚落社会の概念である。聚落社会の定義は「共同防衛の機能と生活協力の機能を有するために、あらゆる社会文化の母体となってきたところの地域社会的統一であって、村落と都市の2種類が含まれている」(鈴木、1969: 79-80)とされる。

では、地域社会的統一とは何か、それは、以下のようである。「社会関係の地上への投影が、一定の地域の上に累積して、一つの独立体の形態をあらわように考えられる場合には、そこに一つの社会的統一が予想される。」(鈴木、1969:44)、これが鈴木のいう地域社会的統一である。

地域社会的統一には、濃淡の差はあるが、近隣、村落、都市、行政的団体、都市依存圏(通勤、通学圏など都市に依存する人々の居住圏)、都市利用圏(都市の商店や機関を利用する人々の居住圏)、通婚圏、伝承共同圏などある(鈴木、1969: 44)、具体的には、〇〇都市圏(=たとえば阪神都市圏)、〇〇村とその通婚圏や都市利用圏、〇〇弁(=特定の方言)の使われる範域、関西、関東、九州といった特定の範域、特定の食習慣の範域(=たとえば芋焼酎/お好み焼き…を愛好す

るエリア), ローカルな○○新聞(△△放送局)の購読圏(視聴圏), ローカルな○○プロ野球チームのホームエリアなどを想起すればいいだろう。

練習問題・・・あなたの思いつく地域社会的統一の具体例をあげてみよう.

# 7. 地域社会の必要性:聚落社会の概念に触れながら(1)

さて、この地域社会的統一のうち、聚落の空間の上にあるものを聚落社会という、聚落とは、鈴木(1969: 43-94)の『都市社会学原理』(以下『原理』と略)第2章「聚落社会の概念及び都市の概念」に定義が見当たらない。であれば、聚落という言葉は国語辞典の意味で理解しておけばよいたとえば、『現代国語例解辞典(第二版)』(小学館、1997年: 1171頁)には、聚落とは集落と同じであり、「人家の群がり集まっている所」とある。したがって、聚落社会とは、「人家の群がり集まっている所」に認められる地域社会的統一である。

この聚落社会は前節にみたように都市と農村がある。そして、人は常にその中で暮らしてきた。その故に、人間文化の発展においてもっとも基本的な地域社会的統一と見なされるのである。それで前節の聚落社会の定義に「あらゆる社会文化の母体となってきたところの地域社会的統一」という文言が含まれていた。

これに加えて、先の定義によれば、聚落社会は「共同防衛の機能と生活協力の機能を有する」とある。では、共同防衛とは何か。まず聚落社会(都市と農村)は、基本的には密居聚落の上に形成されている。この密居は「おそらく共同防衛の必要のためで、…密居は生命財産を共同で守備する構えで」であり、「密居の内と外とは、敵と味方の世界」であり、「密居する仲間は、生死を共にする仲間」であり、「はなはだ長い間の社会不安の時代に、人はそんな聚落内の生活を続けてきた」とされる(鈴木、1967: 45-46)。

映画「七人の侍」のような群盗の来襲は、室町時代末期くらいまでは、現実のものであった (鈴木、1967:55)。かつては、「村を訪れる者すら多くの場合は敵」であり、中世の終わり頃まで山中に盗賊は多く、「山民にとって頼みになるのは同じ村のなかに住む仲間であり、血をわけた人々であった」のである (宮本・山本・楫西・山代、1959:21-27)  $^{(4)}$ .

さらに都市の場合も共同防衛は本質的である。城壁のある都市は日本にはないが、「城壁都市の分布はほとんど全世界的である」(鈴木、1967:53)。ウェーバーによれば、「過去における都市は、古代の都市も中世の都市も、ヨーロッパにおいてもヨーロッパの外においても、特殊の形態の要塞あるいは衛戍地であった」といわれる。「都市はかならず巨大な城壁で囲まれていた」(Weber 1979:615-616)のである。

さらに防衛は外敵に対するのみが任務ではない.たとえば、「古代都市は外敵に対する安全な堡塁であったが、現代の大都市も災害に対する安全な堡塁」とされる(鈴木、1967:57).たしかに、都市には災害や疫病からの防衛を担う、警察、消防、病院、行政等の各種機関がある.それが「安全な堡塁」とまでいうべきか議論の余地はあるとはいえ、大きな都市になるほどに、より高度な共同防衛の専門的機関があるのは確かである.

練習問題・・・映画「7人の侍」を見てない人は見ておこう。また、これをリメイクした、アメリカの西部劇映画「荒野の7人」も見ておこう。その上で、聚落社会の共同防衛の機能について考えてみよう。

# 8. 地域社会の必要性: 聚落社会の概念に触れながら(2)

さて、先の聚落聚落社会の定義(6節)によれば、もうひとつの重要な機能は生活協力の機能であった。生活協力の機能は共同防衛の機能の土台でもある。共同防衛の機能は危急の時に働くのであり、日常の生活協力は危急の時の共同防衛を作動させるために必要である(鈴木、1967:64)。

この生活協力は都市にも農村にもある。この都市と農村の生活協力の説明は、鈴木の『原理』2章では、少し理解に苦しむ部分がある。まず、生活協力は都市に多いのであろうか、それとも農村に多いのであろうか? これについて、鈴木は「この第二の機能(生活協力の機能:筆者補筆)は、何れの聚落社会にも同様の程度に存しているのではなく、都市よりも村落に多く」あるという(鈴木、1967:65)。しかし、他方で、「村落をなし農耕に従事していた人々は、みな自給自足し得たのであるから、生活のために協力しなければならぬ事はそれほどしばしばではなかったであろう。けれども、都市ができて、自給自足力のない人々の聚落社会ができた時から、生活の協力は一日も欠くことのできない必要事項となった」と逆のことをいうのである(鈴木、1967:65)。

さらには、都市と農村で生活の協力の型がまったく違うともいう。すなわち、農村では必要な物資が不足の時は、既知の人から、愛情の関係でもって、借りるか貰う。都市では、未知の人々から合理の関係でもって、買うか借りるのである(鈴木、1967:66-67)。であれば、都市と農村の生活協力の型は異なる。したがって、どちらに生活協力が多いか(少ないか)というような問題自体が成り立たないように思う。

このように、鈴木栄太郎のここでの説明は、やや明晰さを欠くように思う。ただし、非常に重要なのは、形式は異なるが、都市も農村も生活協力の機能を持つ地域社会的統一であるということである。つまり、人々の暮らしを守り、形作っていくのが聚落社会であり、都市であれ、農村であれ、聚落社会は人々に必要である。聚落社会は共同防衛、生活協力、社会文化の母体というのは、そのような意味である。

その共同防衛、生活共同の一つの事例が、6節冒頭の神戸の震災での「近隣の人々による助け合い」(外岡、1998: 704-705)であった。そして、「神戸は…古くからの濃密な人間関係が処々方々に健在だった…。…それが残っている所ほど、(震災からの:筆者、補筆)立ち直りが早かった」(筑紫、2002: 196)という。

たとえば、神戸の東灘には、「だんじり」という祭りがある。その祭りを軸にした人間関係があり、それが相互扶助の機能を持ち、祭りの復活が町の再起の目標にもなったのである(筑紫, 2002: 196;金平, 2021: 220-234)。このような共同防衛、生活協力の機能は、聚落社会(=都市と農村と近隣)にはあるが(鈴木、1967: 91)。他の地域社会的統一には見いだし得ない。

練習問題…神戸市東灘の「だんじり」を、「東灘だんじり会(https://www.uhara-danjiri.jp/)」のホームページなどで見ておこう。また、自分の地域の祭りは、どのようなものがあるか調べて見よう。

# 9. 都市と農村:結節機関論

聚落社会には都市と農村がある。では、都市と農村の違いは何であろうか。この問題は単純のようで、単純でない。都市(的生活)とは何か、農村(的生活)とは何かということについては、有力な学説がいくつもあって、「十分説得的な定式化がなされているとはいえない」(倉沢、1987: 293)のである。

そこで本稿では、都市と農村の違いを描き出した鈴木栄太郎の学説を紹介したい、鈴木は日本の都市をみて、非常にオリジナリティ豊かな都市社会学説を作った人物である。欧米の学者の説は非常に重要である。しかし、それは欧米の都市、農村を見て作った学説である。したがって、日本の初学者がまず学ぶべき学説ではない。

そこで、都市と農村の区別を考えるために、鈴木は次のような都市の機能を指摘している。「国民社会における都市の空間的配列とその間の社会的文化的交流の関係は、そのまま国民社会における都市の機能を表現している。国民社会の中心的存在としての首都を中央に、大中小の多数の都市が全国土のうちに万遍なくばらまかれている。社会的文化的交流は、末梢の極小の都市から順次上級都市に向い、最後に国の中央の首都に及んでいる。そんな流れがあると共に、首都より中小の都市を経て末梢の田舎町に及ぶ流れもある」(鈴木、1967: 69-70)。

この社会的文化的交流とは、中央から末梢に至るまでの命令、統治、暴力、文化、保護、金、人、情報、商品などの流れである。この流れには分岐点ごとに結節のための機関がある。大きな分岐点には大きな結節の機関が、小さな分岐点には小さな結節の機関が配置されている。というか、大きな結節的機関をもつから大きな分岐であり、小さな結節的機関を持つから小さな分岐なのである。この大中小の結節的機関を持った分岐点が大中小の都市なのである。かくて、「都市とは、国民社会における社会的交流の結節機関をそのうちに蔵している事により、村落と異なっているところの聚落社会である」(鈴木、1967:79)と定義される。

この結節機関には、1. 商品流布(卸小売商、組合販売部) 2. 国民治安(軍隊、警察) 3. 国民統治(官公庁) 4. 技術文化流布(技術者、工場、職人) 5. 国民信仰(神社、寺院、教会) 6. 交通(駅、旅館、飛行場) 7. 通信(郵便局、電報電話局) 8. 教育(学校、各種教育機関) 9. 娯楽(映画館、パチンコ屋) 九つがある。1から5は封建時代からあった結節機関であり、6から9は近代都市に加わった結節機関である。もちろん、この後者(6から9)の結節機関が封建時代に皆無だったわけではない。しかし、これらは近代都市で存在が大きくなったのである(鈴木、1967: 141-142).

さて、このような鈴木の結節機関論の面白さは、実は欧米の学説との比較で、一層、理解できる。これについては、山本(2023b:1章)を参照してほしい。鈴木の都市の定義が、日本の都市社会学の独創であり、いかによく考え抜かれた学説であるかがわかるはずである。

練習問題・・・鈴木栄太郎 (1969: 43-94) の『都市社会学原理』「第2章 聚落社会の概念及び 都市の概念 | を精読して、鈴木栄太郎の都市社会学の基礎範疇を理解して、批判してみよう。

# 10. 都市と農村:都市(村落)的生活様式論

とはいえ、どのように優れた学説も批判はある、したがって、鈴木の結節機関による都市の定

義にも批判がある. 鈴木の結節機関による都市の定義は量的な規定であり、それだけでは、見えないものがある. つまり、結節機関の多さ、少なさは、都市度の高さ、低さを示す. しかしそれだけでは、都市と農村の質的違いは分からない.

すなわち、倉沢 (1987: 303) によれば「社会的交流という普遍的な相互作用の形態と量にのみ基づいて説明しようとするならば、村落の様式と都市の様式の、基本的・質的な差異が見失われてしまのではなかろうか」というのである。つまり倉沢の発想では、都市と農村は生活様式が質的に異なる2つの世界である。したがって、結節機関の量という単一の都市度の尺度のみで区別するのは、無理がある。鈴木の定義では、農村は都市度の低いものであるという消極的な規定にとどまってしまうのである。

そこで倉沢が提起するのが、都市(村落)的生活様式論という把握である。倉沢によれば、都市と農村の生活様式は、次の2つで違う。まず、都市における個人的自給性の低さ、農村における個人的自給性の高さである。水道にお金を払って水を手に入れるのが都市の暮らしなら、自家で井戸を掘って水を手に入れるが農村の暮らしである。

ついで、都市の暮らしは、専門家・専門機関(企業、商業、行政サービス)による共同処理が原 則である。これに対して、農村では、非専門家である住民相互の共同処理が原則である。水道局 や水道の業者にお金を払って水を手にいれるのが都市のやり方なら、共同の水源や水路を住民の 共同で維持するのが農村のやり方である。

もちろん,現代の農村では水道も使われている.これは、農村の生活の都市化した姿である.とはいえ、今でも「水」の共同は米作りを行う農村にはなくてはならないもので、その仕組みは生きている(福本,2022a).さらには、電気ならば、都市なら電力会社に依存するが、農村なら小水力発電や木質バイオマス発電ということで、地域住民が発電を担う事例もある(福本,2022b;藤村,2002).

つまり、自家処理と相互扶助システムによって成り立つのが、村落的生活様式であり、多くの生活領域で専門機関が成立して、専門的処理が行わるのが、都市的生活様式である(倉沢、1987:304).

# 11. 地域社会の暮らし: 結びに変えて

最後に資料1の歌舞伎町の記事を見たい. ワンコが逃げて出してしまったのを「あわてて追いかけているうちに、出勤途中のホストやキャバクラ、風俗の子たちが次々と追跡に加わってくれて・・ようやくワンコは戻りました. その間、行き交う車やバイクに一度もクラクションを鳴らされず、怒鳴られもしなかった. 「よかったね」とみんなすぐ去っていきました」. ここにあるのは、オルムステッド、高田、ホマンズの集団である(図6). オルムステッド(3節)の例示では、トラが逃げ出したのだが、ここでは、ワンコが逃げただけの違いである. さらには、歌舞伎町には、町内の一体感や、水商売に生きる人間の連帯感もある(資料1). ここにあるのは、地域の社会集団や社関係に参与する生活構造の一事例である. 歌舞伎町はいうまでもなく、東京(大都市)の歓楽街だが、ここにも、専門機関に依存した都市的生活様式のみで、人々は生きてない.

「他人に過大な期待をかけてはいけない」のも歌舞伎町の暮らし方である(資料1). これは,都市の社会関係の一側面である. 先に倉沢は都市的生活様式と村落的生活様式の対比を示して,鈴木を批判した. しかし,鈴木にも,都市と農村の生活様式(社会関係)の違いについての記述はある. すなわち,都市化とは,

ります。私にはとても居心地

歩中に逃げてしまった事件が

もしてくれるんです。

コロナ禍で敵視され、歌舞

そのままでいい。何も悪くは

と諭されるより、「あなたは

ではやさしくなれるし、協力

い。屋の正業につきなさい

たら「行いを悔い改めなさ

人によるでしょうが、私だっ 言葉で救われるのか。それは

少し前、うちのワンコが散

ありました。あわてて追いか

に住んで、もう20年ほどにな で批判される新宿・歌舞伎町

やさしさも感じます。

伎町の住人ですが、不思議な

ないと経験的に知る人は、逆 しすぎなければ裏切られもし 形でした。最初から人に期待

彼らが苦悩したとき、どんな たちを何人も知っています。

じみ出る、一種のやさしさの

に、深入りしない関係の限り

敵や競合相手には怖い歌舞

「夜の街」の中でも名指し

うに感じています。 が良く、「第2の故郷」のよ

歌舞伎町には確かに「ワケ

ホストやキャバクラ、風俗の けているうちに、出勤途中の

志麻子さん

作家

1964年生まれ。代表 作に「ぼっけえ、きょ うてえ」、「自由戀愛」 など。テレビでタレン 代表きょ ト活動も。

町内の顔なじみの一体感と すぐ去っていきました。 帯意識とも違いました。それ も、水商売に生きる人間の連 てはいけない」ことを、過去 は「他人に過大な期待をかけ そのとき私が感じたのは、

の人生で学んだ人たちからに 所を見つけられた」という人 いダメ男を探しますよ。 始めたら、私は別れて、新し んです。ある日、彼が更生し て、スーツで昼の会社に勤め 今のまま愛嬌だけあればいい 私は「この街でやっと居場

ど、私がダメ男好きだから、 はつくし、小遣いはせびるけ ちの夫は浮気はするし、うそ な世話をやくようなもの。う きな女に一おまえの男を更生

ワケあり」ゆえ、やさし

資料 ] 歌舞伎町. 記事

人」 と目立つ私も、 ここでは さんいます。岡山では「変な ならない「ワケあり」がたく 労しましたが、私など比較に で上京した私もそれなりに苦 婚後に、故郷の岡山から35歳 あり」な人が多いですね。離

れず、怒鳴られもしなかっ

なくなる人も出るでしょう。

す。(聞き手・中島鉄郎)

いよ」と認めてくれる「夜の きない人々を「そのままでい きることを通じてしか息がで

それはまるで、ダメ男を好

「よかったね」とみんな

一度もクラクションを鳴らさ

の間、行き交う車やバイクに やくワンコは戻りました。そ てくれて、大騒ぎの末、よう 子たちが次々と追跡に加わっ

いかがわしさにひかれて来る

しょう。でも、客はこの町の

み込む歌舞伎町は、ここで生

あらゆる人を受け入れ、の

はず。丸ごと清潔にしようと

クリの被害者も数多くいるで もしれません。確かにボッタ 伎町の浄化が進んでしまうか

地味なくらいです。

出典:朝日新聞 2020年7月21日 朝刊

です」と肯定されたい。 ないし、変わらなくていいん

- 聚落社会に結節機関が加われる過程
- 面識している人々に未知の人との社会関係が加わる過程
- 3. 人と人との社会関係に合理性と自主性の増していく過程,

の3つの変動を含むというのである(鈴木, 1969: 513). この内, 3つ目の自主性の増加を都市化 と捉えれば、あくまで、他者(他人)の行為は他者の自主性によるのであるから、「他人に過大な 期待をかけてはいけない」ことになる.

さらには都市では,「一定の限度以上はみずからも許さず他にも求めない. かくの如き節度を堅 く守る人が都会人である.農村的態度はしからず」(鈴木, 1968: 385) なのである.このように考 えれば、「他人に過大な期待をかけてはいけない」という歌舞伎町の暮らし方はまことに都市的な 暮らし方(生活構造)を示しているように思える⑸. このように, 社会学は身近な地域での暮らし に解読の手掛かりを与えるのである.

# 注釈

- (1) 本稿は入門講義を意図しているので、専門の社会学研究者が読むと冗長に感じられる箇所があろうと思う.「練習問題」「自習のための文献案内」を付しているのもその意図である。また、太字で示したのは、入門講義で強調したい項目である。
- (2) 三浦には、「生活構造は、集団参与や社会関係の総体を通して、生活主体が階層構造と地域構造へと、すなわち社会構造へ関与する様式と定義される」(三浦、1991: 50)というもう一つの生活構造の定義がある。この定義は、文化体系への参与は一応、外されており、山本の定義に非常に近いただし三浦においては、定義には含まれないが、重要な含意として、文化体系の内面化についての言及がある。すなわち、「生活構造が形成する社会関係や集団への参与という行動(注:これは山本の生活に他ならない)は、階層構造や地域構造によって客観的に条件づけられ規定されつつも、生活者の主体的な選択可能性を含んでおり、その生活主体の選択可能性は、生活主体と文化体系=価値規範との関連において内面化された価値志向に応じて顕在化し、この価値志向に基づいて社会関係のネットワークが構造化される、と考えることができる」(三浦、1991: 50-51)のである。この引用中の「生活者の主体的な選択可能性を含む」という三浦の理解は、生活構造の重要な含意である。

これは、鈴木 (1986: 178) なら「主体的に、自由選択的に生活目標と生活様式を創出・設定していく」などといういい方になるが、その可能生はどこから出てくるのか、それが、鈴木 (1986: 178) のいうように「主体と文化体系との接触の仕方によって規定される」と考えるなら、生活構造の定義に文化体系への参与を含めるのは肯んずることができる。しかし、主体 (あるいは自由) というものは本当に文化体系との接触に100パーセント、由来するのであろうか、ここが鈴木の生活構造概念への筆者の疑問である。これは、社会における人間の自由の領域を人間がどのように確保するのかという社会学の大問題でもある。ここに 鈴木の生活構造概念への<一つ目の「疑問」=社会学の大問題>がある。

これについて筆者はゴッフマン(1984: 315-317)の「自己」とか「世界の様々の亀裂」というアイデアに魅力を感じている。あるいは、ブルーマーの「自己との相互作用(self interaction)」とか「自己への呈示(self-indication)」も魅力的である(ただし、ゴッフマンは深みがあるが錯綜している。ブルーマーは明晰であるが、深みに欠けるように思う)。Blumer (1969: 96) によれば、"Human action is built up through a process of self-indication."と考えられている。これらのアイデアについては、山本(2023a: 6節)のゴッフマンやブルーマーの解説を参照してほしい。あるいは、その参照が煩雑ならば、本稿2節のフィッシャーの引用を参照されたい。ここでは人々は社会の中で様々なことを行うが、「そうでなければ、われわれはなぜそのようなことをしないでいるのかと悩んだりする」(fischer、202: 19)のである。ここにあるのは、社会における人間の自由(ないし主体性)である。したがって、山本の生活構造の定義では、文化体系への接触は除いている。

とはいえ、三浦や鈴木の「生活者の主体的な選択可能性を含む」という含意(ないし問題意識)は非常に重要である。「生活主体が、たとえば社会体系・体制の指令どおりに作動するだけなら、生活構造論の存立の余地がない」(鈴木、1986: 285)という発想は充分あり得るからである。この点は筆者は鈴木から学んだ点であり、大きな異論はない。ただし、小さな違和感がある。それは以下のようである。

鈴木の生活構造論の鍵概念(キイ)はこの「生活主体」という言葉にある. しかし、「生活主体」

が「主体」である以上、「社会体系・体制の指令どおりに作動するだけ」という事態は、きわめて奇妙な(定義上ありえないともいえる)事態である。では何故、このような鈴木の一見奇妙な発問(問題意識)が生まれたのか。それは誤解を恐れずにいえば、鈴木はそのような事態がありえる(現にある)と思ったのである。この背景には、「高度経済成長」による「豊かな/過剰(affluent)な社会」の実現(とその体制受益感の一般化)がある。鈴木の生活構造論はその「豊か(=過剰)な社会」への懐疑の「生活主体」を見出すための「生活構造論」なのである。つまり、

- 1, 高度経済成長で「豊かさ」の感覚が一般化している.
- 2,「限界ない成長」,「21世紀は日本の世紀」の幻想を生み,「誰しも自分の生活を生涯にわたり ある程度「計算」しつくすことができるような気になってきた. つまり, 教育, 結婚, 子育 て. 昇進, 退職までのビューロクラシー型のライフサイクルの確立がある.
- 3. 生活の内容は私的自由(の空間と時間). 全体性を疎外する私化の方向性でセットされている.
- 4, そして、それらの維持、確保のための条件闘争として生活が社会化されている.

以上, 1から4のような「生活」は鈴木(1986: 172-174)が列挙したものだが、このような「生活」への懐疑(非同調)が鈴木の生活構造論の課題であり、背景である。ただし、ここには、貧困、格差、生活の不安定、リスクなどという今日的(すなわち、新自由主義が一般化した、分断的)な事態は後景にしりぞいている(時代がまだそこまでに至っていなかった)。鈴木の生活構造論は鈴木(1976)が初期の代表的論稿であり、鈴木(1986)にも重要な論稿ある。つまり、高度成長が終了してしばらくの時代、高度成長への熱狂が冷めて、懐疑が始まる(かどうかという)時代を背景にして書かれている。したがって、鈴木の生活構造論は「豊か(=過剰)な社会」(の終了直後)の懐疑(ないし非同調)の生活構造論である。その故に「生活→社会」を重く見ているのだろう。

鈴木(1986: 189)の現状認識では、「今日の文化体系、それへの同調を基軸とする生活様式は、大部分が「油上の虚妄な楼閣」にすぎない」とされる。さらには、もっと印象的なのは、本稿の本文中(2節)に付した「デパートやスーパー」の商品についての調査結果であり、「これからの社会はどんな社会であってほしいと思いますか」という意識調査の結果である(この調査結果は、鈴木、1896: 289-291、参照)。ここにみられる結果から、「<社会>が優先して先導している方向は、<主体>たちがほとんどあまり強くは望んでいない方向なのである」と総括される(鈴木、1896: 289)。ここに鈴木の生活構造論の独創(重要なインプリケーション)と、<今日からみる、二つ目の「疑問」=社会学の大問題>がある。

つまり、「生活→社会」を重く見る鈴木の生活構造論は重要である。しかし、新自由主義が一般化し、分断的な今日の生活構造論は「社会⇒生活」(本稿2節に示すように)(個人⇒「集団・社会関係」⇒社会)を問うべきだと考える。ここが筆者の鈴木の生活構造論への「小さな違和感」である。ただし、山本の生活構造(「社会⇒生活」(個人⇒「集団・社会関係」⇒社会))の図式にも主体(=「生活→社会」)もあれば、自由もある。人々は主体的に(また制約もあるにしても、一応、自由に)社会関係や集団を組み替えたり、受け入れたり、拒否したりして生きているからである。時代の制約はどのような優れた学説であれ逃れられない。鈴木の生活構造論もその例外ではない。

(3) すなわち、「非凡の人間は別として、・・・人間の喜びも悲しみもほとんど例外なく身近の社会集団との関係において生ずる。人間は家族生活の暗さを嘆き、友人の厚誼に喜び、隣人の非礼に怒り、同僚の慰めを求めて生きるもの」と清水(1954: 19)はいう。社会学が生活を捉える時、このように「社会生活」として生活をみるのである。本稿の立場も同じである。

- (4) この点は宮本 (1968: 26) でも以下のように述べられる.「住居が密集したのについてはいろいろの理由が考えられる.外敵や害獣から身を守るためには、人はなるべく一所に集まって住むのがよかったはずである.害獣や外敵の被害は、今日われわれが想像もつかないほど多かったのではないかと思われる.それはいろいろの資料によってうかがわれる.たとえば条里の村の中、大和・河内・和泉・摂津など、いわゆる機内の平野の村には、村の周囲に豪をめぐらしたものが少なからずある。今は豪のなくなったものでも、もとはあったというものが多い.佐賀平野などにも壕をめぐらした村は少なくない.国家が強大な武力と権力をもっていない時代にはまず自分の力で自分たちの生命や財産を守る工夫をしなければならなかった」のである.このような壕は、前期弥生式時代の遺跡にすでに見られたという.起源は非常に古いのである(宮本、1968: 132).ただし、中世の村を見ると、すべての村が壕をもっていた訳ではない.しかし、そうした村は、家の周囲に築土塀をめぐらし長屋門をもっている(宮本、1968: 134).また、山中には地形や信仰を利用して自衛した村もあった。奈良県十津川などがそれである(宮本、1968: 142).
- (5) それで鈴木 (1969: 300) は、都市的な性格として、1. 合理的、2. 打算的、3. 節度の尊重、4. 同情や援助の消極的なること、5. 自己防衛的、6. 権利に積極的で義務に消極的、7. 自己隠蔽的、8. 批判的、9. 警戒的 10. 無干渉的、11. 自己中心的、12. 非建設的、の12の特性を挙げている。この内、「3. 節度の尊重」「4. 同情や援助の消極的なる」「10. 無干渉的」を参照してほしい、歌舞伎町の「他人に過大な期待をかけてはいけない」という暮らし方と通じるものあろう。

# 参考文献

Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, University of California Press. 筑紫哲也 (2002) 『ニュースキャスター』集英社新書.

- Fischer, C.S. (1982) To Dwell among Friends: Personal Network in Town and City, The University of Chicago Press. (=2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだ暮らす―北カリフォルニアのパーソナルネットワーク―』未来社).
- 藤村美穂 (2022)「農的世界から生み出されるエネルギー (2) —木質バイオマス」山本努編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房: 56-57.
- 福本純子(2022a)「水からみた農的世界」山本努編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房: 48-49.
- 福本純子(2022b)「農的世界から生み出されるエネルギー(1) ―小水力発電」山本努編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房:54-55.
- Goffman, E., 1961, Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates, Doubleday & Company (=1984, 石黒毅訳『アサイラム―施設被収容者の日常生活(ゴッフマンの社会学 3)』誠信書房.
- Goode, W.J. (1964) The Family, Prentice-Hall. (=1976, 松原治郎·山村健訳『家族』至誠堂).
- Homans, G.C. (1961) Social Behavior: Its Elementary Forms, Harcourt Brace Jovanovich Inc. (=1978, 橋本茂訳 『社会行動―その基本形態―』誠信書房).
- 金平茂紀(2021)『筑紫哲也「ニュース23」とその時代』講談社.
- 倉沢進 (1987)「都市的生活様式論序説」鈴木広・倉沢進・秋本律郎編『都市化の社会学理論―シカゴ学派からの展開―』ミネルヴァ書房、293-308.
- 三浦典子(1986)「概説 日本の社会学 生活構造」同編『リーディングス日本の社会学 5 生活構造』

東京大学出版: 3-13.

三浦典子(1991)『流動型社会の研究』恒星社厚生閣.

宮本常一(1968)『村のなりたち(日本民衆史4)』未来社.

宮本常一・山本周五郎・楫西高速・山代巴(1959)『日本残酷物語1』平凡社.

奥井復太郎(1940)『現代大都市論』有斐閣.

Olmsted, M.S. (1959) *The Small Group*, Random House. (=1963, 馬場明男・早川浩一・鷹取昭訳『小集団の社会学』誠信書房).

清水幾太郎(1954)『社会的人間論』角川文庫(1992 『清水幾太郎著作集3』講談社).

外岡秀俊(1998)『地震と社会―「阪神大震災 | 記(下)』みすず書房。

鈴木栄太郎(1968)『日本農村社会学原理(下)(著作集Ⅱ)』未来社.

鈴木栄太郎(1969)『都市社会学原理(著作集VI)』未来社.

鈴木広(1976)「生活構造」本間康平・田野崎昭夫・光吉利之・塩原勉編『社会学概論―社会・文化・人間の総合理論―』有斐閣、215-230.

鈴木広(1986)『都市化の研究―社会移動とコミュニティ』恒星社厚生閣.

高田保馬(1922)『社会学概論』岩波書店(\*高田(2003)『社会学概論』ミネルヴァ書房).

高田保馬(1952)『社会学』有斐閣.

富永健一(1986)『社会学原理』岩波書店.

富永健一(1996)『近代化の理論』講談社学術文庫.

Weber, M. (1921) *Die Stadt*. (=1979, 倉沢進訳, 1979, 「都市」尾高邦雄編集責任『ウエーバー (世界の名著61)』中央公論社:600-704).

山本努(2022)「地域社会学の必要性」同編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房:2-21.

山本努 (2023a) 「社会学入門―富永社会学批判を含んで、高田社会学を軸に」山本努・吉武由彩編『入門・社会学―現代的課題との関わりで― (入門・社会学シリーズ第1巻)』学文社:近刊(\*この論稿は、山本、2023、「社会学入門:富永社会学批判を含んで、高田社会学を軸に」『現代社会研究』 9号を転載、改訂したものである).

山本努 (2023b) 「地域社会学入門/都市研究から」同編『入門・地域社会学―現代的課題との関わりで ― (入門・社会学シリーズ第2巻)』学文社:近刊.

# 自習のための文献案内

- ① 山本努編(2023)『入門・地域社会学―現代的課題との関わりで―(入門・社会学シリーズ第2 巻)』学文社.
- ② 山本努編(2022)『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房.
- ③ 高野和良編(2022)『新・現代農山村の社会分析』学文社.
- ④ 外岡秀俊(1997, 1998)『地震と社会―「阪神大震災」記(上・下)』みすず書房.
- ⑤ 倉沢進 (1987)「都市的生活様式論序説」鈴木広・倉沢進・秋本律郎編『都市化の社会学理論―シカゴ学派からの展開―』ミネルヴァ書房、293-308.

地域社会学の入門書ほとんどないが、最近出たのが、①と②である。山本(2023)「社会学入門:富永 社会学批判を含んで、高田社会学を軸に」『現代社会研究』9号→本稿→①の順番で読むと、社会学の 初歩から地域社会学の入門に進める.1つの推奨できる読み方である.②は過疎農山村,家・村論,シカゴ派都市研究を柱にした地域社会学の入門書である.本稿を読んで,②に進むというのもいいだろう.③は最新の過疎農山村社会学の論集である.長期の社会調査に基づいた,最新の研究テーマを学べる.④は阪神大震災の古典的記録になると思う.災害と地域社会の問題を提示した点で,地域社会学の課題を考えるにも優れた書籍になっている.⑤は都市的生活様式論を提示した専門論文でもあるが,同時に,国内外の主な都市社会学理論のコンパクトな案内にもなっていて,初学にも有益である.